

仕事の場としてではなく生活の場となったブラッセル、やはり欧州の首都だと感じる事が多々あります。初めに感じたのは寒い日の空気(大気)が汚れていることでしょうか。底冷えした冷たい朝一番、玄関を出て職場に通うまでの間、空気に臭いを感じてしまいます。昨年より適用されるようになった「SMOG 90」という法律をご存じでしょうか。ある一定のレベルまで大気汚染が進むと、高速道路の制限速度は90キロとなり、またそれ以外の道路の制限速度は50キロとなります。昨年の冬、何度かモンスから出勤してくるたびに、ブラッセル上空の大気に色が付いていたのを見たことがありました。私たちの知らない間に大気汚染が進行しているようです。私のようにすでに肺が汚れていると思われる人間はあきらめが付くのですが、幼い子どもたちにはどんな影響がでるのか少々不安です。

何かネガティブな事から書き始めてしまいましたが、しかしじっくりと腰を落ち着けてみると、この都市のすばらしい部分がたくさん見えてきます。まず「建築は芸術だ」と言うことが解ります。ブラッセルに来るまでは「建築物は人間の生活を営む入れ物」程度の認識しかありませんでしたが、この地に来て「目から鱗」ではありませんが、本当に芸術作品だと解りました。路地を歩いていても大通りを歩いていても、その建物がまるで絵画から飛び出してきたかのように輝いています。犬の散歩で近所の通りを、建築物を見ながら歩いていると、時間の経つのを忘れ、犬が疲れてしまったことがありました。建築に疎い私でも見とれてしまう芸術性がありますよね。そしてそれらの建物を包み込んでいる環境。季節に応じて緑や黄、茶、赤色に変わっていく木々がそのような建築物に見事に調和しています。私は日本に帰られる方に必ず「街並みを楽しんでから帰国してください」とお願いしています。日本には木造建築物とそれを包み込むすばらしい環境がありますが、石造りの街並みはほとんど見る事ができません。すばらしい街並みのあるブラッセルをよく記憶してもらいたいと思っています。冬の影法師の伸びきった景色や、夏の光に磨かれた景色。本当に芸術の中を散策している気持ちになります。また歴史を肌で感じることもできますね。作家の司馬遼太郎さんは歴史的な土地を訪れるとき、ほとんどすべて前もって調べきって訪問されたそうですが、それでも現地に行くことによって、その時代の人の息吹を感じ主人公を肌で感じると書いておられました。また尾崎史郎さんは関ヶ原の戦いをテーマに小説「篝火」を書き上げたあと、「自分は関ヶ原に行くと今でも戦鼓、戦鐘の音や雄叫びが聞こえるようだ」と漏らされていたそうです。実際に歴史上の地に足を踏み入れると、その出来事を肌で感じる事ができるかと思います。例えばモネ劇場。8月25日にはモネ劇場の最寄りのカフェで1830年にオランダに対する不満がオランダへの戦いの発火点になったオペラ「ボルティッチ」の中のアリア「祖国に捧げる愛」などが聞ければ、当時を字面で読むよりはっきりと歴史を感じる事ができるかと思います。「プチリンク」と呼ばれる環状道路を車で通過するとき、そこが14世紀に立てられた城壁の後だとは解りませんが、1381年に立てられて「Porte de Hall」を訪れば、なぜこのような城門が8門も必要だったか解るような気になります。またCaféの「La Fleur en Papier Doré」の片隅に座れば、隣にRené Magritte, Louis Scutenaire, Marcel Mariën達がビール片手にシュレーアリズムについて語っているのを感じるかも知れません。「St.Gery」広場を訪ね、そこがブラッセル発祥のSenne川の中州だったことに驚き、紀元前3千年頃のケルト人の住居を想うか、そのすぐそばの中世の姿を再現された運河を望み、中世の交易都市を想うかし歴史の流れを感じることも楽しいかもしれません。歴史的な物だけではありません。都会の喧噪の中にたたずむオアシス「Parc d'Egmont」。圧倒されるスケールのサンカントネール門。モダンなヨーロッパ議会の建物群。庶民の憩いの場「ブラッセル公園」。1866年から18年もかけて二代目国王レオポルド2世の命によって建てられた「最高裁判所」。レオポルド2世は庶民に法と秩序を教えるためにあのような威圧的な建物を建てたそうです。レオポルド2世の個人的収集品を展示した、ブラッセル郊外のTervurenにある「中央アフリカ博物館」。ヨーロッパ大陸でもっとも多く一度に発掘された恐竜の化石を展示している「王立科学博物館」などは時間を忘れて滞在してしまいました。

私はブラッセル新参者です。生活を初めてふた月程度しか経っていません。それでもブラッセルの持っている、懐の深い文化に少しは触れあったかなと想います。これからどれだけこの街に住むのか解りませんが、出来る限りこの街の持っている魅力を発見し、毎日の生活に潤いをもち続けたいと思います。

《続く》